

令和三年度 近畿納税貯蓄組合総連合会会長賞

税は未来に咲く花の種

橿原市立白檀中学校 三年 佐々木 羽多

「なぜ私たちの教科書は無償なのだろう。」何気なく教科書を眺めていて私は不思議に思った。

小学校は六年、中学校は三年。日本に生きる私たちは計九年間の義務教育を受けている。その日々の授業の中では机やいす、黒板そして教科書などたくさん必要なものがある。また教科書にいたっては学年が変わるごとに無償で配られている。これらのもののお金はどこからでているのか不思議に思い調べてみた。すると、学校の備品は市の税や国からの補助金、教科書は全て国の税によって作られているとわかった。そしてそのための税は、私の父や母、となりの家に住んでいる人、日本のたくさんの人々によって納められているものだった。私はこのことを知り、税は未来に咲く花のための種のように思った。税に支えられて教育を受けてきた人たちが大人になって買い物をするときや働いてお金を得たときなど様々な場面で税を納める。その税という種のおかげで町の安全が守られ、子どもは教育を受けることができる。また、教育を受けた子どもたちが大人になり社会に貢献し世界中で様々な分野が発展してよりよい社会がつくられていくという花が咲く。そして、また税という種をまくことで明るい社会がつくれ…と何度もくりかえされていく。このように税は未来を担う子どもたちの大きな支えになっていて、その税を納める大人たちにもめぐりめぐって税のおかげで教育を受けることができた子どもたちに支えられるという良い循環をつくるものとなっていると私は感じた。

これから先、いつかは災害も起きるだろうし、現在のように感染症が蔓延するかもしれない。そんな緊急時にも大きな役目を持っているのが税でそれをどのように使うのかを考えて実行するのは大人になった私たちだろう。そのいつか訪れる日のために、日本の、地球の未来を担う者として、様々なことを学んで明るい社会という花を咲かせられるような大人に私はなりたいと思う。